

お互いに気持ちを汲み合う関係—思いやりが育つ保育—

○永田陽子

千羽喜代子

長山篤子

帆足暁子

(日本女子大学附属豊明幼稚園) (大妻女子大学) (聖学院大学) (帆足子どものこころクリニック)

1. はじめに (目的と方法)

本研究では「思いやり」の概念を「相手の立場に立つて相手の気持ちを汲む心」と定義し、第12報までは「思いやりの精神構造とその発達過程」の明確化を目的として、保育場面での観察を継続しながら思いやりの定義・観察項目・精神構造図などについて研究を重ねてきた。第13報からは、これまで得られた「思いやりの発達過程」に必要な要素として考えられる「自己受容」「情緒の安定」「自己主張」「自己実現」「葛藤体験」などについての保育者の関わりに焦点をあて検討してきた。(尚、本研究では保育者が「思いやり」を「育てる」のではなく、子どもの持っている「思いやり」が「育つ」ように援助していくという立場をとっている) その結果、保育者に十分に受容されているという実感が情緒を安定させ、自己主張や自己実現を活発にしていき、その過程において他者に出会い、葛藤を体験しながら他者の気持ちに気づいていくことが思いやりの育ちに繋がっていくことを確認した。また、保育者は子ども一人一人が経験している内容に目を向け、その理解に基づく援助が必要であるということが明らかになった。しかし、保育者は「子どもの気持ちを汲むこと」「葛藤を経験すること」などの重要性は理解できても、実際の保育場面で具体的にどのように関わるかに混乱が見られる。

そこで今回はこれまでの研究から導き出された思いやりのキーワードを、事例を通して再検討することを目的とする。

II 事例： うそこの誕生日会 3歳児

11月のA子の誕生日会の時、2月生まれのM男は急に「僕の誕生日会！」と言い、前に出てきてA子を押したりした。保育者はM男に「お誕生日会したいよね。でもM君は2月だからまだお誕生日が来ないのよ。HちゃんもJ君も待っているのよ。今日はA子ちゃんのお誕生日だからお祝いしてあげようね」と言うが、それでもM男は泣き喚いていたので、「ちょっと待っててね。」とM男を押え、A子の誕生日会を行なった。その間M男は他の保育者に抱かれて泣いていた。その後保育者はM男の誕生日会をしたい気持ちがわかっていたので、他の子ども達に「M君はどうしても誕生日会がしたいらし

いの。うそこの誕生日会してあげようか？」と聞くと、「うん、そうしよう！」という返事があった。

M男はにこにこしながら、友だちが歌う誕生日会の歌に合わせて踊り、「何が好きですか？」のインタビューも受ける。その後、保育者が「4歳おめでとう！」とカードをあげる真似をすると、M男は「違うよ。僕のカードは？」と聞いてきた。保育者は「カード欲しいよね。でもカードは本当の誕生日にあげるから、今日はないのよ」とM男に言う。M男は「カード欲しいよ」と泣き出したが、しばらくすると「僕の誕生日早くきて欲しいよ」と言いながら泣き止んだ。10日後に行なわれたS君の誕生日会では、M男は「僕の誕生日会？」と泣きそうになったが、保育者と一緒にお祝いすることができた。

考察：2月生まれのM君。最近周りの友だちが4歳になって誇らしげにしているのを羨ましく感じるようになってきたのだろう。担任には「僕の誕生日会」と前に出てきてしまったM男の気持ちが伝わってきた。そこで何とかしてあげたいと思って、うそこの誕生日会をすることにした。ただM男にはカードのうそこが通用しなかった。

しかし、M男は「僕の誕生日会！」と泣き喚き、自分の誕生日会を強行することを訴えていたが、保育者がふと気が付くと「僕の誕生日会早くきて欲しいよ」という言葉に変わっていた。泣きながら自己をコントロールしている様子がみられたのである。それは、M男が保育者やクラスの他の友だちが自分の気持ちを汲んでくれたのを実感したための変化だと思える。

III 保育者の援助の点からキーワードを再検討する *気持ちを汲む

第13報では、保育者が子どもの「気持ちを汲む」ことが「思いやり」の発達過程における、基本的な「受容される体験」にあたると考え、事例を検討した。その結果、保育者が子どもの気持ちを汲むことにより、子どもが他の子どもの「気持ちを汲む」ことができるように育っていく経過が示され、保育者が日常の保育の中において、自然な子ども同士の「気持ちを汲む体験」を大切に、子どもの活動の流れの中にあるありのままの「気持

ちを汲み取る」ことが大切であるということを発表した。

しかし、保育では気持ちを汲むといっても、その子のやりたい行為をさせることではない。この場合も M 男の気持ちを汲み M 男の誕生会を開催することではない。しかし、「M 君も誕生会したいよね。でも 2 月生まれだからまだなの」といくら言っても、M 男はしたい気持ちばかりが膨らみ気持ちは収まらないだろうと保育者は判断した。そしてここでは、うそっこの誕生会を提案した。結果的にはカードはもらえなかったので M 男はまた大泣きするが、その後の M 男の変化から、このときの何とかしてあげたい保育者や周りの子ども達の思いが、M 男に伝わっていったのだと考えられる。

*葛藤にどうつきあうか

葛藤については第 14・16・18 報で報告しており、トラブルや迷いの状況を葛藤と捉え、葛藤が自己統制能力や共感性を発達させると考えている。しかし、葛藤体験をすれば必ずそのような力がつくというのではなく、その子どもにとって、今その葛藤を体験することが必要なのかという問いや、その葛藤をその子が乗り越えられるだろうという見通しをもっているかどうかのという検討が大切である。

この場合で考えると、保育者は A 子の誕生会が始まった時の M 男の葛藤は乗り越えられるとは思えなかった。それでうそっこの誕生会を提案した。次の M 男の葛藤はカードが欲しいと大泣きした時であるが、泣きの様子から乗り越えられるだろうと判断し、M 男にとって必要な体験になって欲しいと願い、気持ちを受け止めながらカードは作らなかった。M 男の「僕の誕生日早く来ないかな」と言いながら泣いている様子から、葛藤を乗り越え自分の気持ちを収めている段階ように思えた。

*お互いに気持ちを汲みあう関係

「気持ちを汲む」ことを考える場合、保育者が子どもの気持ちを汲むことの重要性ばかりが強調されるが、実は子どもも保育者の気持ちを汲んでいるということが、この事例を読み返し分かった。

M 男は保育者や周りの子ども達がうそっこの誕生会をしてくれたことや、カードはどうしてもあげられないという保育者の思いを汲み、「僕の誕生日、早くきて欲しいよ」と泣きながら、自分の気持ちをコントロールしていったと考えられる。つまり、気持ちを汲むとは双方の気持ちのやりとりが前提としてあり、関係そのものが気持ちを汲み合う関係なのだろう。

*保育者の判断

保育者は子どもに寄り添うことが大切であるとよく言われるが、上記にも述べたようにそれは子どものしたいようにさせることでもないし、子どもを囲い込み 1 対 1 の関係を固定化させることでもない。そのような状態は気持ちを汲むことにはならないし、子どもの育ちには繋がっていかない。寄り添うとは子どもの気持ちに寄り添うのである。この場合でいうと保育者は M 男の誕生会をしたい気持ちを汲むことである。しかし M 男の誕生会にはできない。そしてうそっこの誕生会を提案するが、カードはあげられない。その瞬時の判断は保育者の M 男理解に基づいているし、そこには保育者の価値観がある。こうした保育の価値観が周りの子ども達に及ぼす影響は大きい。

IV 結論

初めての集団生活での 3 歳児の自己主張に注目し、他者の存在を受け入れる過程は第 19 報で報告している。その中では、保育者は 3 歳児が他者とうそ出会っていくかを十分に観察し、その経験を支えていく必要があるとしている。

この事例でも、3 歳児の自己主張が見られるが、もしこれを保育者がわがままだと捉え、ただ我慢をさせるだけでは思いやりの気持ちは育たない。あるいは、3 歳児の主張を全面的に受け入れ M 男の誕生会を繰り返して実施するとしても、その時の M 男の思いを満たすことにはなるかもしれないが、M 男が保育者や他の子どもの思いに気づくことや自分で我慢することを経験できなかっただろう。

保育者や周りの子ども達が、M 男の要求をわかりながら、それに添えないことや何とかしようとしていることを言葉や行動を通して伝えたことで、M 男は周りの思いを感じながら、結果的には自分で我慢をしていくことができた。3 歳児の場合にはそれを言葉だけで説得されても得心できるとは思えない。

また、気持ちを汲むというところに焦点をあてて事例を読み直してみると、気持ちを汲むことはお互いに気持ちを汲み合うことになり、思いやりに繋がっていくように思う。つまり保育者や周りの大人・仲間に充分に受容される関係から、お互いに気持ちを汲み合う関係に変わっていくことが、思いやりの育ちには大切と考えられる。